

Nanakamado



vol. **53**

ななかまど

北海道情報大学 学内報 2011(H23).12.01 発行



写真/eDCタワー全景



発行：北海道情報大学
〒069-8585
江別市西野幌59-2
TEL 011-385-4411
FAX 011-384-0134

目次

- 02 ■ Food Summit 2011
- 04 ■ タイ王国・工学部長会議に参加して
- 05 ■ 保護者との懇談会を実施
- 06 ■ 留学生、秋の宿泊研修報告
- 08 ■ 蒼天祭
- 11 ■ 大学院学生の学会発表
- 12 ■ 自衛消防訓練実施
- 13 ■ 海外事情 アメリカ編
- 16 ■ 中国短期留学レポート
- 18 ■ フランス語学留学を通じて学んだこと
- 20 ■ タイの映画祭に参加
- 22 ■ アートに触れる展 2011
- 24 ■ Library News
- 25 ■ Library News 私の薦める本
- 26 ■ ゼミ紹介
- 27 ■ クラブ紹介
- 28 ■ 大学主要行事等／編集後記



同時通訳の様子

見えてくる—

◎Prof. Jun Nishihira
(北海道情報大学、日本)

「地域を主体とした健康都市づくりと『食と健康』の国際ネットワークづくり」

以上5か国、7名の研究者が20分ずつ英語又は日本語で講演されました。

会場内には同時通訳者専用のブースが設置され、来場者は事前に配布されたレシーバで熱心に耳を傾けていました。講演の後には西平 教授のコーディネートでパネルディスカッションも行われました。一般の市民の方からも講演者への質問が行われるなど食の未来への関心の高さを伺うことができました。

今回のサミットは、北海道や江別市が実現を目指している「北海道フード・コンプレックス国際戦略総合特区」指定を見据えた江別市内で初の本格的な国際学会でもありました。このようなイベントを開催できたことは本学にとってはとても名誉なことでもあります。これも開催にあたって共催、後援、協賛いただいた関係機関や本学教職員、学生、何よりも当日寒中、朝早くから参加していただいた多くの市民の皆様のご支援とご協力のおかげです。皆様方に深く感謝いたします。

(総務課 国際交流・留学生支援事務室)

案内ポスター

Food Summit 2011 in Ebetsu

フードサミット 2011 in 江別
食の未来が見えてくる

2011年11月14日(月)
場所：北海道情報大学 松尾記念館講堂
SYMPOSIUM 9:00~12:30
【入場無料/定員500名】

主催：北海道情報大学
共催：江別市、さつぽろバイオクラスター「Bio-S」(公益財団法人北海道科学技術総合振興センター)
後援：経済産業省北海道経済産業局、北海道、札幌市、地方独立行政法人北海道立総合研究機構、江別商工振興所
協賛：株式会社アズノアップ化学、園印メグミルク株式会社、江別製粉株式会社、株式会社 菊水、株式会社 エスシーシー、株式会社 北海道情報技術研究所、北海道情報専門学校

お問い合わせ (011)385-4430 (北海道情報科学センター) または (011)385-4488 (国際交流・留学生支援事務室)

北海道情報大学
Hokkaido Information University
http://www.do-johodai.ac.jp

Food Summit 2011 in Ebetsu

西平 俊博
北海道情報大学 松尾記念館 401号室

Professor Jun Nishihira, M.D., Ph.D.
Department of Medical Management and Informatics, Hokkaido Information University, Ebetsu, City Hokkaido, Japan

地域を主体とした健康都市づくりと「食と健康」の国際ネットワークづくり

本学が主催する「食と健康」の国際ネットワークづくりは、地域を主体とした健康都市づくりを推進するための重要な役割を果たしている。このネットワークづくりは、食と健康に関する国際的な交流を促進し、食の未来を共に考えるための重要な役割を果たしている。このネットワークづくりは、食と健康に関する国際的な交流を促進し、食の未来を共に考えるための重要な役割を果たしている。

プログラムの一部



パネルディスカッションの様子



講演会の様子

Food Summit 2011 in Ebetsu —食の未来が

平成23年11月14日(月)、本学主催による「Food Summit 2011 in Ebetsu」を開催しました。このサミットは「食の未来が見えてくる」のテーマで江別市、さっぽろバイオクラスター"Bio-S"(公益財団法人北海道科学技術総合振興センター)、函館マリンバイオクラスター(公益財団法人函館地域産業振興財団)の共催、経済産業省北海道経済産業局、北海道、札幌市、地方独立行政法人北海道立総合研究機構、江別商工会議所の後援、株式会社アミノアップ化学、雪印メグミルク株式会社、江別製粉株式会社、株式会社菊水、株式会社エスシーシー、株式会社北海道情報技術研究所、北海道情報専門学校の協賛で開催されました。

サミットの目的は「食の機能性、安全性などの研究開発について、国際的な現状及び道内各地域における取組みを学生、一般市民等に対して情報発信するとともに、食に関する研究開発のより一層の活性化を図る」ことでした。

当日の気候は寒気団により急激に冷え込みましたが、学生・教職員や一般市民合わせて約400人の来場者で講演会場は一杯になりました。

午前9時にオープニングセレモニーとして江別市制作DVD「Food Summit 2011 in Ebetsu オープニング映像」が上映され講演会が始まりました。

本学の長谷川 淳 学長、三好 昇 江別市長の挨拶の後、チェアパーソンとして本学の西平

順 教授(経営情報学部医療情報学科)が進行されました。

講演者と講演テーマは、次のとおりです。

- ◎Prof. Robert Hackman
(カリフォルニア州立大学デービス校、アメリカ)
「伝統的な知恵と現代科学の融合：北海道生まれの植物由来の機能性食品」
- ◎Prof. Yoshinori Mine
(ゲルフ大学、カナダ)
「カナダにおける先進的な食品科学および先端技術の発信」
- ◎Prof. Anil Kulkarni
(テキサス大学ヒューストン校、アメリカ)
「宇宙の微小重力環境から学ぶ新たな食の有用性と食材の開拓」
- ◎Prof. Bo Jiang
(江南大学、中国)
「生活習慣病の改善に有用な天然低カロリーシュガー研究の最前線」
- ◎Assistant Prof. Hye-Kyung Na
(誠信女子大学、韓国)
「韓国における伝統的食素材の科学的評価と機能性食品の開発」
- ◎Prof. Hiroki Saeki
(北海道大学、日本)
「海藻類を利用した機能性食品の開発と環境エネルギー産業への展開」

タイ王国・大学工学部長会議に参加して

経営情報学部 教授 穴田 有一

今年5月、タイ王国のプーケット島で、同国大学工学部長会議主催の第九回国際および国内工学教育会議(9th International and National Conference of Engineering Education, 9thINCEE)が行われました。

この会議は、同国の工学教育改善を目的とする研究会です。毎年一回、タイ国内の大学工学部長および大学工学教育に携わる教員が集い、基調講演、研究発表、親睦行事などが行われます。昨年の第八回までは、タイ国内の工学教育に関する会議でしたが、今年は国際部門が加わりました。今後は、国際および国内の二部門体制で実施するという事です。大変光栄なことに、筆者は、第一回国際部門の招待講演を行う機会に恵まれ、同会議に出席しました。筆者の講演内容は、大学初年次の物理学教育について、最近の筆者の研究を解説するものです。今回の会議には、五十数名の工学部長が出席されていましたが、モンクット王工科大学など、同国の主要な大学の工学部長がほとんど出席していました。

会議では、まず二つの基調講演が行われ、引き続き国際部門一会場、国内部門三会場に分かれ、工学教育に関する研究発表が行われました。基調講演の一つ目は、タイ王国・エネルギー省・エネルギー事務次官Norkun Sitthiphong博士による『Learning and Research on Engineering Education』と題する講演、二つ目は、アメリカ合衆国・Robert Morris 大学教授Yildirim Omurtag博士による『Education in the Early 21st Century: Challenges and Changes』と題する講演でした。前者では、タイ王国が目指す技術者教育の方向性が解説され、後者では、グローバル化の中で技術革新と競争が続く二十一世紀は、益々思考力が重要になることが指摘されました。国際部門と国内部門の一般研究発表の内容は、eラーニング、カリキュラムの検討、

タイにおける日本語教育の方法など多岐にわたっていました。どの発表からも、若い教員・研究者の教育改善に対する熱気が伝わってきました。研究発表件数は、国際部門十二件、国内部門五十四件でした。

タイ王国の大学工学部の数が日本に比べると少ないためでしょうか、工学部長、教員がみな親密であり、親睦会ではゲームも行われるなど、和気あいあいとしたものでした。

ご存知のように、今年の9月から、同国では五十年ぶりともいわれる大水害が起っています。11月の現在でも多くの地域が浸水したままです。新聞、テレビの報道によると、工業製品生産では世界的な影響が出ており、同国の市民生活についても、飲料水、食糧、衛生など様々な面で大きな影響が出ています。しかし一方では、穏やかで明るい国民性のためか、洪水と折り合いをつけてながら日常生活を営んでいる様子もうかがえます。同国と日本は、現在も、また歴史的にも、良い関係を維持しています。今回、会議に参加したことを振り返り、市民、学生、企業、研究者など様々な面で、今後交流を維持し親交を深めていくことが、両国のためのみならず、ポーターレス化しつつあるグローバル社会では極めて大事なことでありと再認識しました。





保護者との懇談会を実施



平成23年度の保護者との懇談会を9月24日(土)に一年生と三年生を対象に実施しました。

一年生の保護者懇談会では、長谷川学長から挨拶と本学の概要について説明があり、平子教養部長から教育目標と学生生活について、木田教務課長から教務関係について、中村就職部長から就職状況について説明の後、各クラス担任との個別面談が行われました。

また、三年生の保護者懇談会では、長谷川学長から挨拶と本学の概要について説明があり、中村就職部長から学生の就職支援について、長井研究科長から大学院について説明があった後、各ゼミ担当教員との個別懇談を行いました。

この懇談会は、保護者の皆様对本学の教育目標や本学が目指す人材育成、教育の実情、就職状況等を理解していただくとともに、学生の学修状況や学生生活の現状、卒業後の進路等について個別に懇談できる機会としております。

保護者の皆様からは、学業や学生生活の状況、卒業後の進路・就職活

動などについて熱心に懇談されておりました。

今回は、三連休の中日ということもあり、保護者の皆様の出席に影響があるのではとも思われましたが、昨年以上の出席者があり、遠方からの出席者からは、連休を利用して、ご子息の様子も見ることができ大変有意義でしたとの声もいただいております。

懇談会の合間には、施設見学を実施し、新築されたeDCタワー、図書館の自動書架や明るくゆったりとした閲覧室、パソコンを配置した自習室、学生が自由に利用できる学生プラザ、そして、一元的な学生支援を行うことができる学生総合事務局等も案内させていただきました。

学生のみなさんが整えられた学習環境の下で、充実した学生生活を送っていただけることをご理解いただけたことと思っております。

ご多忙中にもかかわらず大変多くの保護者の方々に、かつ遠方からもご出席していただいたことに感謝申し上げます。

(学生サポートセンター事務室)

留学生、秋の宿泊研修報告

(道立洞爺湖少年自然の家)

国際交流・留学生支援事務室 室長 今長 豊

平成23年10月22日(土)から10月23日(日)、外国人留学生と異文化交流会の日本人学生、引率教職員の総勢五十八名が道立洞爺湖少年自然の家で宿泊研修を行いました。

洞爺湖町は2008年に世界の環境問題等を話し合う国際会議「洞爺湖サミット」が開催され、今年2011年9月から10月にかけて、第2回日本ジオパーク全国大会が開催されました。

洞爺湖脇に聳える有珠山は百年間に四回の噴火が起こっており、最近では2000年の噴火はまだ記憶に新しい活火山としても有名です。今回の宿泊研修はいくの天候で予定していた金比羅火口災害遺構を見学することはできませんでしたが、洞爺湖を眼下に見下ろせる展望台で昼食弁当を食べながら、国立自然公園の雄大さを実感したり、車窓からの黄葉・紅葉を楽しむことができました。

宿泊施設に着くとすぐ入所式がありました。そこで施設の担当者より、歓迎の挨拶とともに施設利用についての注意事項を聞き各班に分かれ研修がスタートしました。研修目的の

ひとつでもある、留学生同士でも普段交流の少ない学年の異なる先輩と後輩の交流や、異文化交流会の日本人学生と留学生の間で日本語と中国語の学習も兼ねたゲームを楽しんだり、体育館ではバスケットボール、卓球、バトミントン、インディアカなどのスポーツで汗をかき、大浴場の中でも交流を深めることができました。

研修二日目は6時に起床し、各班の部屋、共同トイレ、洗面所、お風呂場などの清掃を行いました。これらの活動では班のメンバが各自の担当作業をいかに効率よく協力して行えるかが研修成果として問われることとなります。先輩が後輩に適切な指示を出し、メンバ全員が協力できている班は良い評価を受けていました。寝具の整頓のやり直しを指導されている班もありました。全部の班の清掃チェックが合格してやっと朝食を取ることができました。

研修二日目の主活動は野外炊事体験です。昼食を自分達で調理して食事後の後片付けまでを行いました。メニューはカレーライスです。食材や薪、調理器具などは施設で準備していただきました。用具班、かまど班、調理班に分かれ、それぞれ担当





からの注意を聞き作業に入りました。
薪割り、火おこし、かまど調理など初めて体験する学生も多く、ひやひや、どきどきの連続でしたが、なんとか無事にカレーライスをいただくことができました。しかし問題は後片付けでした。

ここ洞爺湖町は冒頭にも記述しましたが、環境問題で国際会議が開かれた町でもあり、しかもこの施設の目前には洞爺湖があり、排水やゴミで環境汚染しないように細かな注意が必要です。合成洗剤の使用は禁止され生ゴミも堆肥として再利用を行っています。お米を研ぐ際の研汁は流さず食後の食器洗いの洗剤代わりとして利用したり、油よごれは新聞紙でふき取り、使った鍋、包丁、食器などはかまどの残り火で沸かしたお湯で熱湯消毒するなど衛生面と環境汚染には細心の配慮が要求されました。

今回の宿泊研修は本来の目的である「学生同士の交流を深める」「集団行動時のマナー学習」に加えて、自然環境問題についても考えさせられる研修となりました。

今年3月に発生した東日本大震災、今も続く福島原子力発電の事故の影響など多くの難題を抱えて復興に向か



っている日本で留学生たちは、様々なことを学んでくれていると思います。

おかげ様で、宿泊研修自体は無事に楽しく終えることができました、留学生にとっても充実した2日間を過ごすことができましたと確信しています。

そして母国にいる留学生の保護者の皆様にも、留学生達が日本で元気に有意義な留学生生活を送っていることを知っていただき少しでも安心していただけることを願っています。

23th

So-ten Festival

第23回 蒼天祭

2011.10.8(Sat)
~10.9(Sun)



10月8・9の両日、第23回目となる蒼天祭が行われ、本学学生のほか、近隣の市民の方も多数訪れ、賑わいの中で終わることができました。





すべての皆様にとつ!!

大学祭実行委員会 委員長 近澤 潤

平成23年、秋。

本学において、二十三回目となる蒼天祭が開催されました。

二日間とも近年稀に見る素晴らしい天候に恵まれ、蒼天祭の賑わいも例年以上のものとなり、実行委員会一同ほっとしました。

今年の蒼天祭は例年とは大きく異なり、私たち実行委員会としては「挑戦」でした。

来場者の導線をより確実なものとするために、大幅に会場配置を変更したことや、新企画を次々と打ち出し、ステージ企画をより充実した内容のものとなりました。他にも装飾や広告等、随所において変革がありましたので、ご来場いただいた方には、ご体感いただけたかと思いません。

また実行委員会活動の方針も一新し、より効率のよい作業方法を模索いたしました。

結果、入場者数は千六百九十五名(前年比+約三百)を記録し、歴代の記録を大きく更新することとなりました。

この蒼天祭を無事に開催できたことは、地域の皆様、私たちの活動に快く賛同してくださり、資金面で援助していただいた協賛企業・個人の皆様はもちろん、私たちの活動をより効率良くするため、ご

多忙の折、全面的なバックアップをしてくださった大学関係者の皆様のおかげだと、心より感謝しております。

私事ではございますが、実行委員長としての一年間は大変貴重な経験ばかりで、多くのことを学び得ることができました。つらく、胸を痛めることも多々ありましたが、こうして一年間職務を全うすることができたのは、約七十名の仲間の存在のおかげです。

共に汗を流し、頭を抱え悩み、眠気を抑えて日夜の準備作業に取り組んだ、かけがえない仲間たちの姿は、実行委員長の私から見ても大変誇りに思います。そんな仲間たちとこの蒼天祭を運営できたからこそ、こうして良い結果を残すことができたと思えます。「みんな、ありがとう!!」

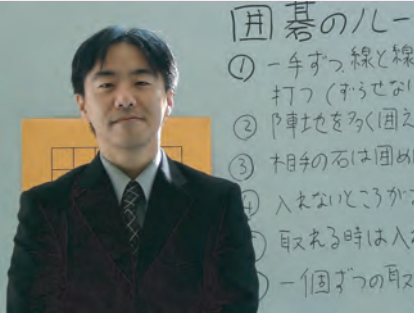
学生実行委員会は12月より、後輩たちが引き継いで新体制となり動き始めます。皆様にはご迷惑をおかけすることもあるかと思いますが、今後とも、実行委員会活動へのご理解とご協力を、心よりお願い申し上げます。

最後となりますが、蒼天祭運営にご協力いただいたすべての皆様に、実行委員会を代表してお礼申し上げます。ありがとうございました。



蒼天祭で囲碁教室が盛況

囲碁部顧問 竹内 典彦



蒼天祭2日目の10月9日(日)に、103教室にて、北海道情報大学囲碁部が主催し、北海道情報大学の後援で、「プロ棋士遠藤悦史七段囲碁教室」が開催されました。午前中は遠藤七段による多面打ちと入門・初心者用教室が行われ、昼休みをはさんで、午後にも同じように多面打ちと入門・初心者用教室が開催されました。多面打ちとは、上手の人が、何人もの人と同時に対戦することを言います。

午前と午後を合わせて来場者は五十名近くに上り、かつてない盛況を呈しました。近くの中学生も何人も来場してくれましたし、近隣の住民も多数参加してくれました。また留学生も何人も来場して対局していきましました。

遠藤悦史(えんどうよしふみ)七段は、今年から出身地の岩見沢を拠点に普及活動を始めた、北海道ご出身のプロ棋士(日本棋院東京本院所属)です。プロ棋士を招いてのこうしたイベントは、本学囲碁部創設以来初めてであり、北海道情報大学の物心両面でのサポートのおかげで、今回このような企画を実現できたことは、本当に幸いでした。

おかげをもちまして、囲碁部部員の刺激にもなり、学生本因坊戦全国大会にも参加した、システム情報学科1年生の樋口君も「プロの方と対局できてとても勉強になりました」と話していました。また先端経営学科3年の杉山君も「プロの方の指導を受けることができてたいへん参考になりました」と語っていました。

遠藤七段ご自身も、「こうしたイベントを通じて囲碁を普及することができれば、棋士として本当にうれしいです。またいつでも声をかけてくださいます。今回はとても楽しかったですし、いろいろな方とお会いして交流することができて、とても有意義でした」と語ってくれました。

情報メディア学科2年の囲碁部部長の飛田君も、「今回プロ棋士の方をお招きすることができて、本当に名誉でしたし、たくさんの方の入場者が来てくれたのも、とてもうれしかったです。」と語ってくれました。

今回来場した方のうち多くの方が、「とてもよい企画だった。また来年も開催してほしい」と話してくれましたので、できれば来年も実施して、蒼天祭を盛り上げることができれば幸いです。



北海道情報大学大学院

経営情報学研究科経営情報学専攻(修士課程)学生の学会発表について

日本福祉のまちづくり学会 第14回全国大会（於：大阪府堺市／国際障害者交流センター）

8月28日

陸 壘

メディア制作論プログラム

修士課程 2年

「高齢者と地域を結びつける『縁側サービス』

— その3 台湾と中国における『社区』が果たす役割 —



私は、南京大学から本学情報メディア学部へ編入し、2010年春に大学院に入学しました。修士論文のテーマは「中国における高齢者の方向性 —先進事例をどのように活用すべきか—」で、指導教員は隼田先生です。隼田先生の科学研究費補助金の研究プロジェクトでは、研究協力者として、この1年間に台湾と中国での調査に参加しました。

今回、本学の支援を得て、8月27日から29日の3日間、大阪の堺市で開催された日本福祉のまちづくり学会第14回全国大会に参加しました。発表のテーマは「高齢者と地域を結びつける『縁側サービス』その3 台湾と中国における『社区』が果たす役割」です。コミュニティ崩壊が進んだ現代社会において、高齢者の引きこもりや行方不明、高齢化の進んだ町内会の空洞化や老人クラブの疲弊などによる高齢者の孤立化が大きな問題となっています。本発表では、高齢者と地域コミュニティを結び付ける「縁側」のような場を提供している台湾と中国の「社区」について行った文献調査と現地調査の一部を報告しました。学会の発表を通して、良い経験を積むことができ、大変勉強になりました。優秀な専門家や研究者と研究成果を交流し、研究議論を行いました。高齢者等の外出支援、光による緊急情報伝達、高齢者の地域生活のQOL等について、様々な新しい研究情報と研究結果を得ることができ、自分自身も成長したと思います。

大会は国際障害者交流センターで行われました。国際障害者交流センターは障がい者の方々にも使いやすいように設計されています。交流センターに宿泊体験し、内部見学ができたことも、自分の研究に対してとても役に立ちました。エレベーターのボタンが足で使えるようなデザイン、トイレ・浴室の様々な工夫など、障がい者の方々にも簡単に使えるような工夫が多く見られました。学会に参加して、本当に良かったと思いました。お世話になった先生たちに心より感謝申し上げます。

指導教員 隼田 尚彦

今回の発表は、陸壘君の修士研究の一部と、私の海外調査研究プロジェクトの成果の一部を組み合わせた内容でした。特に、陸壘君の発表は、彼自身による中国と台湾の社区に関する中国語および日本語の文献調査の結果が大きく貢献しているもので、関連研究を行っている他大学の諸先生方からも質問があり、彼自身にとっても、私にとっても非常に有意義な学会発表であったと感じています。

自衛消防訓練を実施

防火管理者 中島 安敬



平成23年9月20日(火)、教職員及び学生による総合的な自衛消防訓練を実施しました。この訓練は、火災などの災害に対して災害の発生を想定し、消防計画に基づき通報、消火及び避難等を速やかに且つ安全に行い、被害を最小限に抑止し、日常における防火意識の向上を図ることを目的に行われました。

消防訓練は、本学松尾記念館一階サーバ室から出火したことを想定し、まず、午後1時12分頃に火災報知器が発報し、続いて火災警報アラームが鳴動すると本学自衛消防隊の通報連絡班が火災現場へ急行し、また、記録班は自衛消防訓練状況の記録を開始しました。

通報連絡班による火災場所の確認後非常放送が行われると、消火班は火災現場に急行し、粉末消火器や屋内消火栓を利用した初期消火(模擬消火)、また、講義中の教員は教室の窓を閉め、学生の事前点呼など避難準備を行いました。

午後1時13分頃に、通報連絡班が江別市消防署に119番通報で火災発生を連絡し、また、非常放送(第一報)を聞いて学長室に集合した消防隊長(学長)、副隊長及び各班长による緊急協議で延焼の危険が高いと判断し、自衛消防隊本部の設置と全員の避難が決定されました。

直ちに、搬出班により机等が所定の場所に搬出され、自衛消防隊本部が設置されました。

午後1時14分頃には、通報連絡班による非常放送(第二報)により、学生、教職員及び来学者への校舎外への避難指示が出され、以降、避難誘導班による避難誘導、救護班による負傷者の救護、搬出班による重要書類の搬出及び機器操作班による防火扉の操作などの諸活動を行いました。

避難場所において、避難予定者のうち三名の点呼確認ができず時間を要しましたが、別途確認を取ることとして、午後1時33分頃に点呼確認終了し、消防隊長(学長)が江別市消防署の責任者に報告しました。

午後1時35分頃から、江別市消防署員ご指導の下に教職員及び学生代表による消火器を操作した消火訓練と消火班の職員による消火栓による放水訓練等を行い、午後1時54分頃に訓練を終了しました。

訓練終了後、午後一時55分頃から江別市消防署の責任者から講評があり、消防設備の使用法の熟知や避難等へ注意・指導がありました。

最後に、消防隊長(学長)から訓示があり、避難者点呼で確認ができなかったことについて個人の行動が全体に迷惑がかかるのことに注意があり、午後2時7分過ぎに無事終了しました。

なお、本学にeDCタワーができたことにより、建物の総面積が二万㎡を超えたことにより、防災訓練を実施することが義務づけられました。

また、江別市で災害が発生した場合の野幌鉄南地区住民の収容避難場所に指定されていることから、教職員及び学生の災害に対する危機管理意識を高揚させるためにも、来年以降は防災訓練を実施していくこととなります。



札幌教育センター

川崎 康孝

今回の海外事情を通じて、学んだものはたくさんあると思います。

シアトルに渡ってまず始めに感じたのが気候の違いでした。シアトルの夏の気候は穏やかで、雨はそんなに降らないらしく、私たちの滞在中も一日を除いてはずっと快晴でした。飛行機で九時間のフライトを経て、シアトルに到着して直ぐに「M」に行きオリエンテーション行いました。そこで英語での自己紹介と、私たちの面倒を見てくれた先生や学生と、今回の留学のメンバーと顔合わせをしました。始めの二日間はホテルで滞在し、三日目の夜にホストファミリーとボウリングパーティと立食式の晩御飯を共にし、各ホームステイ先に行くことになりました。この時のご飯が、トルトイヤーと言う、とうもろこしを使った

ランブルエッグ、スパイシーな味付けのチキン等とトルトウーヤを三週間食べ続けました。始めは、私に合う食事ではありませんでした。が、最後の朝食にはもうしばらく食べないのかと思うと名残惜しくも感じました。

学校では、テストによるクラス分けを行った後に、クラスで英会話をベースとした講義を受けました。文法等といった堅い物ではなく、スピーチを通してまず英語になれることが大切であると教えられ、アメリカのコメディイ一番組「フレンズ」を通してスラングの勉強をしたり、最後の週には五分程度英語で「フレンズ」の続きを想像して演劇を行うといった事を行いました。又、「M」にある様々な学科の授業を拝見しました。歯科、自動車、料理、看護、就職活動など様々なものを見ましたが、学生が調理を行っているレストランで食事をしたり、実際に看護における応急救護を行ったりと、充実した内容でした。私の受け持ちになった方だけかもしれませんが、皆さん非常にユーモアがありリアクションも大きく日本人のように堅くなく、初対面の先生の授業でも面白いと感じるものが多かったです。しかし、専門的な分野の授業を見学する中で、自分の語彙力の無さとヒアリング力の拙さを痛感しました。

学校内にはフリーで使える「フリー」回線が存在し、これは学校だけではなくシアトル全体に言えることですが、中心街に移動するバスの中においてもフリーで使える物があったり等、日本からパソコンを持っていった私としては凄く重宝しました。またFacebookも構内

の電光掲示板に紹介されているほどみんなに知られており、お世話になった学生さんともそれを通じて、長いお付き合いをしていく事になりました。

放課後は、シアトルの街を観光に行きました。シアトルには本当に観光名所といえる場所が街中にたくさんありました。パークプレイスマーケットや、スベースニードル等、ダウンタウンと呼ばれる地域周辺は本当に賑わっていました。シアトルはスターバックスコヒーの発祥の地と言うだけあり、歩いている多くのひとがスターバックスコヒーの飲み物を持ち歩いていました。街を歩いていると、二ブロックに一軒はスターバックスが建っているように感じました。スターバックス一号店はパークプレイスマーケットに面して建っているのですが、市場の通りである為に音楽を奏でている人や、マジックを披露している人など、お祭りのような賑わいの続く場所でした。

近くには水族館や、博物館、ビーチがあったり、野外でライブイベントをやっていたり等、本当に賑やかで通りを歩いているだけで楽しかったです。パークプレイスで警察官の方と一緒に握手してもらい、写真を撮ってもらったのですが、アメリカの警察の方はやは





り手も身体も大きく、力強く感じました。

私が一番印象的に感じたのは、シヨッピングにおいて、レジの人や並んでいる人が気軽に会話するということでした。どこにいても「How are you?」から入り、最後には必ず「Thank you!」というやり取りがあり、どこにいても店員は笑顔で、お客さんとは楽しそうにしていたのが印象的でした。私も、アメリカに渡ってすぐにコンビニで声をかけられた時は正直会話が出来なかつたのですが、二週間を過ぎたあたりから買い物の際にコミュニケーションを図れるようになりました。実際にコミュニケーションを図るととても面白い物そのものが楽しく感じるようになりました。

多くのアメリカの方と会話をしましたが、日本人は多くが「Shy」であると言われました。アメリカにおいて「Shy」であるということはアメリカ人の堂々とした姿勢というものを学ぶことが出来たと思います。今後就職活動を行う際にもそういった姿勢を出しているように身に着けたいと思います。

今回の短期留学を経て数多くのことを学んだと思います。英会話はもちろん、異文化交流や大企業の見学など、将来のビジョンを描くという意味でも私にとっても良い経験だった

と思います。また、英語に関してだけではありませんが、自分に足りないもの、身につけることでステップアップしていけそうな類の事を学ぶことが出来たと思います。

札幌教育センター

和田 有司

レイクワシントン・インスティテュートオブテクノロジーでの研修を終えて、私の英語学習方法は変化しました。実際にネイティブの英語に触れながら学習することは、英語を習得するための一番良い方法の一つであることを実感しました。コミュニケーションで使用できる言語が英語のみで、これは英語学習において最適の環境であった。この絶好の機会を最大限利用するために、私は情報のインプット・アウトプットを英語で行うのみならず、脳内の思考をも英語で行うよう努めた。この試みは研修初日、現地随行員であるベンジャミン・ジャフアリ氏と初めて会話をしたとき、私の思考スピードが彼の話す英語についていけなかつた経験から始めたものである。以後二十日間、私は日本語に触れることを避け、英語の中で生活することに努めた。

レイクワシントン・インスティテュートオブテクノロジーでの英語の講義は私



を決して退屈にさせなかつた。授業のほとんどが聞くこと・聞かれることを主眼においた双方向コミュニケーションであったためである。日本の英語の授業は聞く・理解すること

に重点を置いたものであり、学習意欲が湧くとは言い難いものであった。情報のアウトプットがないと人間の脳は活性化しない。この点においてアメリカで体験した講義形態は効果的であった。講義は少人数で行われ、まず講師との対話から始められる。その生徒に対する問いかけは、現地での日常生活や文化体験の感想などを述べさせるのもであった。また、いかにその生徒のスピーキングが拙くとも、講師が急がず正すのみであった。その修正も生徒の発言を遮ることはなく、講師は傾聴する態度を崩さなかつた。

講師との対話が終わると生徒同士のディスカッションが始まる。世界が二週間後に終わるとしたら何をするか、仕事において大切なことは何か、架空の賞を創造し、またそれらを受賞するクラスメイトは誰か、など日々刺激的な議題が用意された。ディスカッション





は二、三人の少数またはクラス全体で行った。拙い英語ながらも、お互いに相手の意思を汲み取り、足りない言葉を補助しあった。双方が英語で表現できない場面に直面したときは辞書を開き、学

何かを表現する学習形態の有効性を体感できた。この体験を活かし、今後の個人的な英語学習に、スピーキングを主体とした方法を取り入れたい。

今回の海外留学は、二十日間という短期間であったが、私の人生に大きな影響与える経験となりました。異国での生活はすべてが新たな発見で満ちており、未知の文化や価値観に触れることができた。ホームステイで最も印象に残った出来事を紹介する。

ぶ喜びを共有した。

講義ではコメディドラマを用いたりスニングの訓練も行った。英字幕付きで観賞したが、作中ではスラングが多用され、ストーリーを完全に理解することは困難だった。観賞が終ると、作中に出てきたスラングを講師が解説する。ここでは辞書に載っていないような刺激的な言葉を学習した。また研修終盤では、そのドラマの一編を視聴し、四人チームで物語の続きを創造し短い芝居を演じよ、という課題が出された。

私は演劇経験があったので、脚本のほとんどを創作した。講師からはハリウッドのようだとの評価を頂いた。

以上のように、講義は常に刺激的であった。持っている知識の応用し



ある日の夕食の席での話である。その日はホストマザーの息子夫婦が来訪していた。他愛のない会話の中で、奥さんが私に、将来はアメリカで暮らす予定はあるのか、と尋ねてきた。私は拙い英語で、カナダで仕事を見つけ、そこで暮らす予定だ、と答えた。さらに理由を聞かれたので、私はカナダに対して平和で治安の良いイメージを抱いている、と答えた。私の英語を理解するや、奥さんは声をあげて笑い、次のように反論してきた。アメリカのほうがより安全である。その理由とは、

アメリカは大きな軍隊を持つているからだ。カナダは極々小さい軍隊しか持っていない。もし敵国に攻撃されたらどうしよう

もない。しかしアメリカはたとえ攻撃されてもやり返すことが出来る。だからアメリカは安全なのだ。

私は愕然とした。一家団欒の席で、戦争というデリケートな問題について自らの主義主張を躊躇なく表明する文化にも驚いたが、何よりも、その奥さんが、自国が戦争することについて肯定的で、そこに一片の迷いも恥らもなかったことに衝撃を受けた。私の拙い英語では、突っ込んだ質問を出来ずに終わり、彼女の真意は測りかねるが、彼女の言葉の中には、対岸に立つ命に対する敬意は感じられなかった。自国の強大な軍事力を誇らしく語るその様からは、何故戦争が起こるのか、その理由を想像する知性を感じ取れなかった。

私は予てより、世界平和について自らが貢献できないものかと、漠然と思索していたが、その一件を期に、より具体的に行動していかねばならないという、言いようのない危機感を持つようになった。知識も経験も乏しい今の私には、世界を平和にする方法など考えも及ばないが、確かな第一歩として、世界有数のコミュニケーションツールであるところの英語を習得するため、努力を重ねている。

この様な貴重な経験を得る機会を与えて頂いた北海道情報大学に対して感謝すると共に、この経験を将来に生かし、国際的に活躍する人材になるよう、不断の努力を以って精進していきたい。



「言葉」で伝える「心」に伝わる

医療情報学科 1年 石丸 千絢

今回、大学で中国短期留学の募集を耳にした時から必ず参加したいと思っていました。なぜなら、私は高校の修学旅行でオーストラリアに行ってから、海外にとっても興味を持つようになったからです。日本とは全く異なる世界に、魅了された記憶が鮮明に残っています。また、大学での中国語の講義を通して言語や文化にとっても関心を持っていました。私実際に中国で生活した一カ月間を伝えさせてもらいます。

中国では、目にするものすべてが新しく新鮮でした。車や人がとにかく多いこと・スーパーでは見慣れない食べ物(特に果物)や飲み物があること・本場の中華料理など。中国人にとってはあたりまえのことですが、中国での生活が初めての日本人としては、驚きや発



見の連続でした。それと同時に、中国という国は、日本と比べて生き生きとしている印象を受けていました。もちろん、言語の壁や食生活・生活環境など苦労もありました。しかし私にとっては、苦労を感じさせないほど、中国での生活は毎日が楽しく幸せな気持ちでいっぱいでした。

南京大学での語学研修では、私たちが生活で使うことを中心に指導してもらいました。両替・飲食店・買い物・病院・電話の仕方など。その日に学んだことを、午後の自由時間で実際に使ってみるということも多くありました。言葉が通じた時のうれしさは、今でも忘れられません。

休日には友人と地下鉄に乗り、湖を見に行ったり、ショッピングに出かけました。店先やレストランなどでは自分たちだけで中国語で伝えなくてはなりません。皆で協力して頑張ったことは、今振り返ると、とても良い思い出となっています。

語学研修の前半・後半には研修旅行が組み込まれていたことで、中国の観光名所を沢山目にして、肌で感じることができました。上海では、豫園・上海博物館・寒山寺・虎丘など。北京では、明の十三陵・天安門広場・故宮・北京動物園・万里の長城など多くのところに連れて行ってもらいました。特に、万里の長

城に行ったときの感動は、本当に素晴らしいものでした。研修旅行ということを忘れてしまいうくらい、大満喫させてもらいました。

今回の短期留学で、私は本当に中国が大好きなことが分かりました。参加させてもらいながらも、中国での生活は、とても楽しく幸せなものでした。言語の壁がなくなった時の楽しさや感動は、計り知れないと思います。しかし、短期留学で中国語に慣れることはできませんでしたが、自分の思いを上手に中国語にするにはまだまだです。努力を惜しまず、中国語を習得できるように、頑張りたいと思います。また、将来的には中国で長期留学に挑戦してみたいという目標ができました。

中国では沢山の出会いがありました。人はもちろんですが、中国という国・言葉・風景。ずっと心にしまっておきたい、かけがえのない宝物になりました。これからは日本でも沢山の出会いがあるはずです。その為にも、日々、自分を成長させていきたいです。日本語でも中国語でもその他の言語であっても、自分自身の気持ちや態度が、何かを伝える上で大切ではないかと感じました。そして、少しでも、誰かの心に伝わる出会いがあればうれしいです。

最後に引率して下さいだった玉置先生・田中先生、北海道情報大学の関係者の皆様、今回このような貴重な経験をさせて下さったことに、心から感謝しています。本当にありがとうございました。

「当たり前」が当たり前じゃなかった1カ月

システム情報学科 1年 川股 学

大学に入学してから半年も経っていないが、大学生活にも慣れていない状況で臨んだ中国短期留学でした。中国語は大学に入ってから始めたため、まだ会話が出来るレベルではありませんでした。そのため、留学に行っても本当に大丈夫なのかと悩むこともありましたが、玉置先生の後押しがあり、中国語留学に参加する決心をしました。結果から言えば、今回の中国での短期研修はとても有意義でした。慣れ親しんだ母国から離れて、会ったことのない人々と触れ合えたことは、私にとって貴重な財産になりました。



私は中国留学を経て多くのものを得ることができたと感じています。得られて最もよかったと思うものは、この研修を通して、私の価値観が大きく変化したことです。中国は同じアジアの国ですが、文化や習慣、考え方が何もかも違っていました。中国に着いて間もない頃は、一カ月も過ごせるのだろうかと不安になりました。しかし、南京大学で中国語の授業を受け、その日に習った中国語を使って街で買い物をしたり、現地に出会った人と食

事などをしたりして、中国語を実際に使った。現地の人とコミュニケーションを重ねていくうちに、確実に実力が付いていき、それが自信になっていくことを実感していました。そして、日を重ねるにつれて不安はなくなっていく、街に出ることが楽しくなっていました。楽しいのと同時にとても衝撃を受ける光景を目の当たりにすることがありました。それは路上でお金を乞っている人たちが何度も目にしたことです。中には自分の子供に物乞いをさせて、お金をもらっている人もいました。私はその光景を見て、ものすごく心が締め付けられるような気持ちになりました。いかに自分が恵まれている環境で親や周りの人達に愛されて育ってきたのかを知らしめられた感じがしました。他にも、楽器を弾いてお金をもらっている人や、障がいを見せてお金をもらっている人もいました。その一方で中国で出会った人たちはとても前向きな人が多く、誰もが胸を張って生き生きと生活しているという印象を受けました。今まで日本で何気なく暮らし、のうのうと生活してきたことに危機感のようなものを覚えました。「日本に戻ってもこれまで通りではいけない」という気持ちで湧いてきました。

次には良かったと思うことは外国人の友人ができたことです。私の語学力はまだまだ低いですが、それでも自分の意思を伝えたくて、知っている数少ない単語を使ったり、ジェスチャーでもいいから、なんとか伝えようと必死になりました。案の定、完璧に伝えることはできませんでしたが、なんとか自分の気持ちを相手にわかってもらえたときには、大きな喜びを感じました。普段、日本の友達と当たり前のように会話ができていたため、「自分の気持ちを伝えられる喜び」を感じなくなっていたのだと思います。そのことに気づけたこともよかったです。感じていきます。

私は中国短期留学を通して、大きく成長できました。中国語の能力はもちろんのこと、中国という国に行き、様々なものを見て、中国人以外の色々な国の人も出会うことができ、多くの貴重な経験をさせていただいたことで、語学力習得への意欲や中国の歴史に対する興味が湧き、これからも積極的に学習を続けて行くという決意を固めることができました。このような素晴らしい経験ができたのも、多くの人の支えがあったからこそだと思います。私たちが短期留学中支えてくれた玉置先生と田中先生、南京大学の先生方や情報大学の中国人留学生の方々、その他にも私たちの見えないところで多くの人の協力があったことだと思えます。私はこのような貴重な経験をさせてくれた全ての人に感謝いたします。この短期留学で得たものは、今後の人生においてきつと大きな意味を成すと信じています。それをより確かなものとするために、今後も努力を積み重ねていきます。

フランス語留学を通じて学んだこと

システム情報学科 3年 細川 大輔



「もしも貴方がこの文を読んだ時、海外へ行ったことがないのであれば、すぐに仕度して旅行すべきだと思えます。どこでも構いません。英語の通じる国でも良いし、第二外国語で学んだ事を活かすために、ロシア、ドイツ、中国も良いと思います。私は夏休みの間、フランスへ留学してきました。」

「貴方はフランス語喋れるの?」と、よく聞かれます。とんでもない。私は仏語検定四級程度の実力しか無いし、フランス人と話したこともありません。つまり全く喋れないまま、一人で外国へ行ききました。英語も堪能ではありません。一緒にいる同級生の方が、私よりずっと良い成績を修めています。フランス語を始めたきっかけは、「Jゼミにフランス語があったことです。皆からは、「何故フランス語?」と聞かれます。まさに、その反応を待っていました。確かに、情報大学でフランス語を勉強している者は少ないと思います。だからこそ、こちらの土俵へ入りました。元々人と違うことをしたいと考えていた私は、軽い気持ちでフランス語を始めました。それが正解でした。そして、たった二週間ですが留学も果たしました。その留学は、私の考えを大きく変えました。まず英語の必要性です。日本では、英語を使う必要性は少ない。しかも、今の時代はパソコンが翻訳してくれる。外国人と会話することも減多にありません。仕事で英語を使う職業もあれば使われない職業もあります。そこで、「日本人なのに何故英語なんか……」と言う考えが生まれます。しかし、一度海外に出るとそうは行きません。それは英語圏から外れても同じことです。語学学校初日、多国籍の人が集まるホールで、入学式が行われました。先生が



ホームステイ先の家族と



フランス語で説明をすると、皆、わからない顔をします。「Alors...; I speak English.」先生が話し始めました。私は、「フランス語わからないの？ 仕方ないから英語使ってみよう」と言われたように感じました。現実を突きつけられました。英語が公用語じゃない国で長文の英語をスラスラ使うなんて、こんなの絶対おかしいと思いました。しかし、航空機の移動に関しても、友人と会話する時も英語でした。当然ですが、英語は重要だと痛感しました。また、語彙も重要でした。確かに、単語の順番や構文は重要ですが、それ以上に重要なのが単語です。単語を知っていれば連想して相手が何をしたいかわかりますが、単語を知らないとい何も話せない。構文を疎かにするという訳ではありません。それ以上に重要なのが単語だと感じました。

お金は、沢山かかりました。飛行機代で往復二十万円、ホームステイや学費などで二十万円、その他にパスポートなどの準備、フランスでの移動・飲食、トータルで五十万円程です。お金はアルバイトで貯めました。莫大な金を一瞬で使い、自分って本当にバカだなとも思いました。でも、後悔なんてありませんでした。

どんなに良い経験を出来るからと言っても、五十万円という大金は早々に出せるものではないと思います。しかし、「学生のうちにしかできない出費」と考えると、大きな価値があると思います。きっと、用意できない金額ではないと思います。アルバイトでも、コツコツ貯めれば必ず届きます。しかし、睡眠、学習、自由の時間が大きく奪われます。この大学でも、アルバイトをしている学生は多いと思います。その対価として、「モノ」を選ぶか、「経験」を選ぶか、あるいは「遊び」を選ぶか。私は、就職したら長期の休暇は取れないと思い、在学中に行くことを決意しました。

一度留学したら、もう何も恐くないと思います。帰ってきてからも、こんな幸せな気持ちで勉強するなんて初めてでした。

「二年生のうちに『海外事情』の語学研修へ行けばよかった、ような……」そう思えるほど、外国は自分を変えてくれます。

今回は、先生に沢山助けてもらいました。それはとっても嬉しい事でした。しかし来年はもう、誰にも頼らないで準備出来る様にしたいです。貴方も、外国へ行って見ませんか？ 英語、第二外国語には、講義も、Jゼミもあるのです。言葉が完璧に通じなくても大丈夫、きっと、大丈夫。自分もそう言い聞かせてフランスへ行きました。

フランス留学は、私の、最高の経験になりました。

タイへ行ってきました。

情報メディア学科 田邊 優人



「タイに行くことになりました。」私の口から出た言葉に、両親や友達はとても驚いていた。それもそうだろう。当事者である私自身が一番驚いていたのだから。

簡潔に説明すると、私が主演で島田英二先生と撮影した短編映画がタイの映画祭の最終選考に残ったのでタイへ行くことが決まり、タイに行くのであれば、ということの情報大学と提携しているラジャマンガラ工科大学に表敬訪問を行うことになった、とそういうことである。短編映画のタイトルは「The Numberman

Theory(ナンバーマンセオリー)」というもので、その内容は、数字をこよなく愛する男(私)が自身の体を使い、なぜか全身タイツを着て1から9を表す架空の大会に出場する様を追ったドキュメンタリー風なコメディ作品であ

る。私自身この作品がとても好きなのだが、タイでもこの笑いが受けるのか、少し不安でもあった。

一通り私の周りを驚かせたところで出発当日となった。海外へ行くということが初めてな私にとって当日は期待と不安で胸がいっぱいであった。新千歳空港から羽田空港へ行き、羽田から国際便で約七時間程飛ぶとタイに着く。飛行機が落ちたりしないかな?などと小学生が考えるようなことをジューズを飲みながらぼーっと考えているとタイに着いた。飛行機から降りた瞬間に北海道では感じたことの無い熱気に包まれた。暑いとは聞いていたものの、実際に体感してみるとんでもなく暑い。38℃近くあったと記憶している。タイの空港へ着いてから現地のガイドさんにホテルまで送ってもらい、その日はタイ料理やムエタイを堪能した。

タイ二日目、私たちは映画祭「9Fest」に向かった。当然周りは外国人だらけであり日本語など通用する気配では無かった。私は英語など喋れないのだが、幸いにも三年生時に当大学の英語講師であるベン先生にパニックにならない為の英語を教わっていたのでパニックになることだけは避けることが出来た。あまり会話は出来ていなかったのだが…。そんなこともあり、英語に関しては留学経験のある島田先生にお任せし、私はただ座っていた。そうして始まった映画祭。この映画祭は9をテーマにした映画祭であり、様々な国から出品された作品はクオリティもさることながら、課題へのアプローチの仕方もそれぞれ斬新で私にとっても良い刺激になった。映画を見つつ、高そうな料理たちを頬張っていると授賞式へと移った。ど

の作品が一番なんだろうなあと考えつつ見ていると、なんと私たちの作品が最優秀作品に。さらには主演男優賞まで。全く予期していなかったことにテンパる私と先生。わたわたりしているうちに壇上に上がられ、スピーチをすることに。初めての海外で英語でスピーチすることになるとは思ってもみなかった。私は、大きな声で今の気持ちを表すことにした。

「Thank you! Thailand!」

中学生のような稚拙な英語ではあったが、会場はとも盛り上がった。日本語でスピーチするよりも何倍も緊張してしまったが、とても達成感のあるスピーチだった。受賞してからは地元のTVクルーからインタビューをされたり、写真をとられたりと、すこし有名な気分を味わった。最優秀&主演男優賞をもらい大満足のうちに映画祭は終わった。

次の日、表敬訪問のため、本学と交流のあるラジャマンガラ工科大学(以下R MUTT)へ向かった。R MUTTに着くとまずその敷地の広さに驚かされた。迷うこと数分、表敬訪問ということでスーツだった私たちは大学を少し歩くだけで熱気にやられてしまった。なんとかR MUTTの先生方と合流することが出来、いろいろな話をする事が出来た。難しい話は島田先生にお任せし、私は記録用のカメラを回すことに一杯だった。その後、大学内の様々な施設を見学し、生徒の作品などを拝見させてもらった。R MUTTの映像製作の環境はとても良く、衣裳室やシアターなどもあり、この設備で映像を撮ってみたいと思うほどであった。そして次の日、始業式に参加した。言葉が理解できないので何が行われているのかはわからなかったが神聖なものであるということだけは理解できた。R

MUTTの学長と一緒に写真を撮り、始業式を終えた。その後、学生にガイドに付いてもらって観光をし、最後にR MUTTの先生方と食事を楽しんだ。

今回の旅を通して自分の中で何かが変わったような気がした。よく海外に行くと人生観が変わると言うが、本当にそのとおりだなと私は思う。異文化コミュニケーションの大切さというものを身をもって学んだ。他にもここに書ききれないようなことをタイへの旅で得たと私は思っている。今回のような貴重な体験をすることが出来、私は情報大学に入学して良かったと、心からそう思った。今回の旅に関わって頂いた全ての人に感謝の気持ちでいっぱいです。本当にありがとうございました。



● 「文献情報検索講習会」を開催しています。

図書館では、より効果的に図書館を利用して自学・自習に役立てられるよう、各サービスの利用法、文献情報検索等についての講習会を開催しています。講習会は、授業科目「ビギナーズセミナーⅠ、Ⅱ」、「日本語表現Ⅰ、Ⅱ」、「情報専門演習」、「医療情報演習」、「ゼミナールⅡ」のコマを使い、担当教員と連携しながら随時実施し、4月から11月までに延べ20回、513名を数えています。

講習会では、図書館利用について、各種資料、設備の利用法をはじめ、図書館賞やブックハンティングなどの図書館企画への参加など積極的な図書館活用を促しています。

文献情報検索では、蔵書検索(OPAC)の使い方をはじめ、国立国会図書館の雑誌記事索引(NDL-OPAC)、国立情報学研究所のWebcat PlusやCiNii(サイニイ)を使った資料、論文本文の探し方、入手法を教えています。また、課題解決、レポート作成に必要なテーマ(キーワード)の設定や絞り込み方について、知識検索サイト"ジャパンナレッジプラス"や連想検索DB"想"を使いながらレポート実例を用いて講習し、確かな情報源とは何か、Web情報のコピーや剽窃(プラジャリズム)の問題に触れながら、正しい引用の仕方(ルール)、参考文献の書き方などを教えています。

図書館では、このような一般講習会のほか、特定のテーマやデータベースに特化した主題別検索講習会も随時開催し、学生の学びの日常がよりの確に効率良く運ぶよう教育支援を継続しています。



● 「ブックハンティング2011」

今年で3年目となる「ブックハンティング」。学生が書店で直接選書を行うこの企画は、昨年度より参加人数は少なかったものの、参加リピート率は50%以上と非常に高く、アンケートからも参加者たちの「楽しい」「たくさん本を選べて満足」という気持ちが伝わってきました。

この企画の良さをもっとたくさんの人達に知ってもらいたいと、今年度は新しく図書館HPに「ブックハンティング」のページを作りました。ブックハンティングの参加方法、当日の流れ、今までに選書された本の紹介などを載せていますので、「ブックハンティングってどんな企画?」と思った方は是非一度HPを覗いてみてください。

<http://www.do-johodai.ac.jp/library/bookhunting/book.html>

<実施報告>

実施日：2011年9月2日(金)、9月24日(土)

場所：紀伊國屋書店札幌本店

参加人数：8人

選書冊数：137冊



私の薦める
1冊の本

このコーナーでは、日頃の勉学や大学生活を豊かにするため、図書館で読みたい本や読むべき本を発見する手助けとして、本学の教員等による推薦図書をご紹介します。ブックガイドとしてお役立て下さい。

『論語物語』

下村湖人 著

講談社 1981 講談社学術文庫

配架場所: 4階文庫・新書 <請求記号 123.83||SMK>



© 講談社

文=玉置 重俊(たまき しげとし)
(システム情報学科教授)

私の専門分野は、中国哲学なので、やはり学生諸君には、下村湖人の『論語物語』という書を薦めたい。因みに、『論語』という書物は、江戸時代の儒者伊藤仁斎が「最上至極、宇宙第一の書なり」と絶賛したように、儒教の開祖である孔子の言説、あるいは孔子と弟子たちとの問答の言葉などが収められた中国の代表的古典であり、これはもちろん世界的な名著と言える。私の本音を言えば、皆さんにはできれば、『論語』を愛読してもらいたいのだが、今回は、『論語』をより深く味わうための格好の参考書を紹介します。

下村湖人が書いた『論語物語』には、もちろん『論語』の原文に基づきながら、彼自身の新しい創作と表現も加えて、独自の孔子像や弟子像が具体的に描かれている。この書を読んでゆくと、なぜか孔子の人柄や心情がとても身近に感じられると同時に、弟子たちの性格や気持ちなども、つぶさによく理解できる。歴史的にも、世界最古の学校といわれる孔子塾の中で、孔子と弟子たちがどのように生活し、またどのような政治や学問のテーマについて、語り合っていたのか、当時の塾における対話の雰囲気やイメージなどが明確に分かってくるのだ。これは、一生涯を懸けてひたすら『論語』を研究した下村湖人にしかできない才能であって、彼自身の研鑽と情熱のたまものなのである。

したがって、本書は、我々に孔子が説いた言葉や哲理の重みを分かりやすく解説するばかりではなく、孔子自身と弟子たちの人間像、あるいは各人の嬉しさ、悩み、苦しみなどの心情を、見事に教えてくれる哲学書にもなっている。とにかく学生諸君には、是非とも、本書を熟読して頂き、孔子という人物が如何に偉大で、魅力的な教育者であったのかについて、知識と関心を深めてもらいたい。

『統計学を拓いた異才たち』

デイヴィッド・サルツブルグ 著、竹内恵行、熊谷悦生 訳

日本経済新聞出版社 2006

配架場所: 5階開架書架 <請求記号 417||SAL>



© 日本経済新聞出版社

文=遠藤 雄一(えんどう ゆういち)
(先端経営学科講師)

本書は統計学の知見を切り拓いてきた人たちの半生を、著者自らが聞き取ってきたエピソードを中心に整理した統計学史的な本です。数式を一切使わずに、例示しながらその統計手法が求められた経緯を説明していますので、統計学を本格的に学んでいない学生も読み進めることができるでしょう(統計手法の用語は出てきます)。

今日、統計手法は、選挙開票速報、テレビの視聴率、新しい治療法の有効性調査をはじめ、新製品開発や需要予測、顧客・消費者行動分析、広告宣伝調査など、あらゆる分野で使用されています。実社会は複雑で、不確実なものです。そうした中、私たちはより確実なものを求め、将来の道標となるものを願います。

著者は統計学の専門家(Ph.D. in Statistics)であり、大手製薬会社ファイザー(Pfizer)の中央研究所において臨床実験、薬学等に関する統計的問題に携わり、その後統計コンサルタントをしながら大学で教鞭もとっています。

第6章「百年に一度の洪水」ではこれまで起きたことのない洪水に対してその水位を予測できるのか、第18章「喫煙はがんの原因か」では喫煙とがんの関係について初期の論文から議論の経緯と統計手法の問題を提示し、第28章「コンピュータは自分自身に向かってゆく」ではコンピュータが与えた影響を説明しています。これらは関心のある方がいるのではないのでしょうか。

数学に関心のある学生はもちろん、数学を学ぶ意味を見いだせない学生もぜひ本書を開いて、こうした統計手法に関心を持ってもらえたらうれしく思います。計算が嫌いでも苦手でも、現在はコンピュータがあるのだから。



森川ゼミは、今年度で二期目、まだ始まったばかりのゼミです。私の本職がゲームプログラマーということもあって、ゲーム好きの学生が多く集まっています。

ゼミ生の大半は、趣味が高じて？ゲーム業界を目指していますが、ゲームをプレイすることと、ゲームを作るということは同義ではありません。試行錯誤を繰り返し、見た目ほど簡単ではないということを思い知らされています。

ゼミは三、四年生合同で行い、月に一度、それぞれが自身で決めたテーマを発表するという形で進めています。発表はゲーム作品が多いの、なるべくウケ狙いという暗黙の約束事とで、他に類を見ない明るいゼミになっています。

ゲームはソフトウェアの側面より評価されることはほとんどありませんが、派手な視覚効果や程よいAIを、限りあるCPUパワーと少ないメモリ容量で実現する術は研究課題には最適です。

また、視覚に訴えるものが多い、のめり込む様にプログラムを作る学生が多いことから、学習教材としても最適かと思われ

ます。
先ごろ行われた、東京ゲームショウ2011の北海道情報大学ブース展示においては、展示作品の全てが森川ゼミ生の作品でした。初出展、経験不足という困難も杞憂に終わるほどの成功を収めています。来年度の東京ゲームショウにおいても、更にプログラム技術をあげたゼミ生の活躍を約束いたします。

本ゼミのテーマは「ロボティクスとロボットプログラミング」です。ロボティクスとは、機械工学、電子工学、制御工学、情報工学、人間工学等々を始めとする広範囲な学問分野における研究成果を総合して、ロボットを設計したり、製作したり、あるいは使用したりすることに關する研究のことです。本ゼミは、eDCタワー八階のシステム制御実習室に設置されているロボットアーム(関節が六つある最新鋭小型産業用ロボット)やそのオフラインプログラミングツール(パソコン上で動作するロボットシミュレータ)を用いて、ロボットアームにいろいろな作業を行わせるためのプログラムを組むことによって、ロボットソフトウェアの世界の一端を身を持って学ぼうというゼミです。

平成20年度に「ロボット・組込みソフトウェアコース」がシステム情報学科に新設されたことに伴って誕生した新しいゼミで、現在の四年生がゼミ一期生です。来春、本ゼミの最初の卒業生が社会に羽ばたくこととなります。三年生の時に、工場で稼働している産業用ロボットや、工場から外の世界に出て活躍し始めている防災ロボット、介護ロボット、警備ロボット、癒し系ロボットなどについて文献で学んだり、上記ロボットシミュレータの使い方やロボットアーム実機の動かし方を学び、四年生になると、それまでに習得したことをベースにして、工場での組み立て作業のシミュレーションを行うためのプログラムを組みます。そして、それらを総合して卒論に取り組むこととなります。





現代美術 同好会

私たちはグラフィックデザインやメディアアートなどの
芸術表現を用いた総合演出を研究しています。
絵に対する技術的なことよりも作品に向かう気持ちを大切にしています。

自分たちで個展を開催することを目標にして活動して
月3回程度集まって、展示会や大会に向けて作品を作っています。
これまで観賞会や親睦会なども数回行っており、わきあいあいと活動しています。

見学や体験入部を随時受け付けております。
活動への協力やお誘いも受け付けております。
気軽にご連絡ください。



大学主要行事等

＜8月2日～12月1日＞

◆◆ 教職員の動向 ◆◆

◇大学◇

9月1日付
(退職)
教授 木村 達也 (先端経営学科)

◆◆ 主要行事 ◆◆

◇法人本部◇

10月 6日 理事会・評議員会
11月30日～12月2日 有限責任監査法人トーマツ「平成23年度期中監査」

◇大学◇

8月 2日 A〇入学試験 (B日程)
5日 前期授業終了
6日、8日 合同試験
9日～9月19日 夏期休業
11日～9月 7日 夏期集中講義
9月 1日～7日 追再試験期間
3日～4日 A〇入学試験 (C日程)、高大連携特別 A〇入学試験
5日 教育研究評議会
9日 経営情報学部教授会
16日 情報メディア学部教授会
20日～21日 スタートアッププログラム
20日 消防訓練
22日 後期授業開講
24日 保護者と教員との懇談会
30日 全学教授会
30日 前期未卒業者 学位記授与
10月 3日 教育研究評議会
8日～9日 蒼天祭
14日 経営情報学部教授会
15日 月曜授業実施日
21日 情報メディア学部教授会
15日 編入学試験 (1次募集)
15日～16日 A〇入学試験 (D日程)
22日～23日 留学生宿泊研修
11月 5日 A〇セミナー
7日 教育研究評議会
9日 日本私立学校振興・共済事業団 実施状況等調査
11日 経営情報学部教授会
14日 Food Summit 2011 in Ebetsu
18日 情報メディア学部教授会
25日 全学教授会
26日 水曜授業実施日
27日 推薦1期入学試験

◇大学院◇

8月 9日 学位論文等中間報告会 (兼 北海道情報大学学術奨学生選考会)
9月17日 大学院入学者選抜試験 (1次募集)
11月17日 研究科委員会

◇通信教育部◇

8月 1日～ 6日 夏期スクーリング (1)
8日～13日 夏期スクーリング (2)
19日 秋期第1回入学選考
9月 1日 後期 I P メディア 授業放映開始
5日 秋期第2回入学選考
20日 秋期第3回入学選考
10月 1日 後期インターネットメディア授業開始
3日 秋期第4回入学選考
21日 平成24年度第1回入学選考
11月10日 教育責任者協議会
18日 平成24年度第2回入学選考
19日～20日 後期印刷・インターネットメディア授業科目試験①

◆◆ 広報活動 ◆◆

＜進学相談会＞

8月:北海道 8会場 (苫小牧、旭川、北見、釧路、帯広、札幌、函館、室蘭)
9月:北海道 2会場 (小樽、新札幌)
青森県 2会場 (青森、八戸)
11月:北海道16会場 (新札幌 (2)、紋別、苫小牧 (2)、函館、小樽、深川、旭川、北見 (2)、網走、釧路、帯広、札幌 (2))

埼玉県 1会場 (さいたま)

＜高校内ガイダンス＞

8月:北海道 2校 (帯広三条高校、岩見沢西高校)
9月:北海道 1校 (北星学園大学附属高校)
埼玉県 1校 (小松原高校)
千葉県 1校 (敬愛学園高校)
10月:北海道 3校 (千歳北陽高校、札幌丘珠高校、北海道栄高校)
秋田県 1校 (大曲工業高校)
埼玉県 1校 (大宮開成高校)
東京都 1校 (関東第一高校)
11月:北海道13校 (網走桂陽高校、札幌大谷高校、札幌藻岩高校、南幌高校、旭川明成高校、石狩翔陽高校、札幌拓北高校、札幌南陵高校、小樽桜陽高校、富良野高校、恵庭南高校、室蘭清水丘高校、遺愛女子高校)
東京都 3校 (関東第一高校、東京学園高校、東海大学菅生高校、昭和第一高校、東京実業高校)
神奈川県1校 (横浜清風高校)
千葉県 1校 (柏日体高校)

＜高校内進路講演会＞

8月:北海道 1校 (訓子府高校)
9月:北海道 2校 (札幌北高校 (定時制)、野幌高校)
10月:北海道 4校 (音更高校、旭川大学高校、札幌大通高校、旭川龍谷高校)
11月:北海道 4校 (札幌東商業高校、札幌東豊高校、別海高校、大樹高校)

＜高校出張講義＞

8月:北海道 1校 (北海学園札幌高校)
9月:北海道 1校 (札幌東商業高校)
10月:北海道 2校 (枝幸高校、稚内商工高校)
11月:北海道 4校 (池田高校、札幌西陵高校、江別高校、天塩高校)

＜高校訪問＞

8月:栃木1校、埼玉県1校
9月:北海道221校、青森県30校、茨城県2校、埼玉県8校、千葉県1校、東京都13校、神奈川県7校
10月:北海道49校、秋田県24校、埼玉県2校、神奈川県1校
11月:北海道13校、東京都1校

＜オープンキャンパス＞

8月 2日 旭川、帯広
7日・21日・28日 本学

10月 9日 本学

11月13日 本学

＜A〇入試・奨学金説明会＞

9月11日 本学

◇通信教育部◇

入学説明会:本学独自

8月: 5会場 (札幌、函館、釧路、東京、鹿児島)

9月: 2会場 (本学、東京)

合同入学説明会:私立大学通信教育協会主催

8月: 2会場 (名古屋、大阪)

9月: 3会場 (札幌、東京、福岡)

◆◆ 主な来学者 ◆◆

◇大学◇

10月20日 フランス フレンチフードクラスター 一行

◇広報室来学者◇

8月 9日 仁木商業高校 (教員1名)
9月 6日 倶知安高校 (教員1名)
7日 野幌白樺自治会 (大学見学会:10名)
9日 札幌東豊高校 (大学見学会:生徒38名、教員2名)
16日 石狩翔陽高校 (大学見学会:生徒14名、教員1名)
21日 江別高校 (大学見学会:生徒37名、教員2名)
27日 奈良朱雀高校 (大学見学会:生徒38名、教員3名)
10月 7日 南幌中学校 (大学見学会:生徒1名)
13日 千歳北陽高校 (大学見学会:生徒14名)
14日 札幌創成高校 (大学見学会:生徒25名、教員1名)
21日 駒澤大学附属岩見沢高校 (大学見学会:生徒50名、教員4名)
27日 上土幌高校 (大学見学会:生徒14名)
27日 江別第三中学校 (大学見学会:生徒9名)
11月10日 広島総合技術高校 (大学見学会:生徒40名、教員2名)
10日 旭川龍谷高校 (大学見学会:生徒10名)
11日 様似高校 (大学見学会:生徒44名、教員4名)

訂正とお詫び

前回第52号にて、9ページ「着任のごあいさつ」中、齋藤静司先生の所属及び職名が「システム情報学科教授」となっておりますが、これは「医療情報学科准教授」の誤りでした。謹んでお詫びし、訂正申し上げます。

す。
(下)

の飛躍を期待しま
す。皆さんの新年
てほしいもので
の発信拠点となっ
め、創造的な情報
い「絆」を育むた
学内報とともに強
DCタワーが、本
今春完成したe
外活動も報告され
ています。

た。
考えさせられまし
ついてあらためて
「絆」の大切さに
きていくうえで
に直面し、人が生
う。未曾有の災害
だ。未曽有の災害
事は東日本大震災
だったことでは
さ。未曽有の災害
さんの最大の関心
2011年、皆

編集後記

学内報について、ご意見、ご要望などがございましたらnanakamado@do-johodai.ac.jpまでお寄せ下さい。